

平和を紡ぐ

広尾学園小石川中学校2年生

古賀 英琳

私の祖父は現在 90 才の戦争経験者だ。祖父は、小学 5 年生だった 1944 年の秋から、東京から新潟へ、家族と離れ学童疎開していた。

疎開中は常にお腹が空いていて辛かったこと、疎開先の人たちに差別されて子供たちでハンガーストライキを起こしたこと、家に帰りたくてたまらなくて貨物列車に忍び込んで東京まで逃げ帰った子がいた話、終戦間近には学童疎開先近くの長岡も空襲に遭い、祖父たちは山奥へとみんなで逃げたことなど、時々、祖父は戦争体験を話してくれる。祖父が小学 6 年生の 1945 年 8 月 15 日に終戦の日を迎え、戦争が終わってもしばらくは殺されるかもしれないと、祖父は親戚と新潟で生活し、10 月にやっと東京へ戻ったそうだ。「死と隣り合わせ。疎開中はいつも空腹。人間らしい生活はできなかった。戦争は絶対にもう繰り返してはいけない。」と祖父は語る。

先日、昭和館を家族で訪れた。昭和館は戦争を追体験できる場所だった。昭和館の貴重な展示物を見ると、祖父の体験談、戦争というものの現実味を感じた。空腹に耐えられず疎開した児童が食べていた胃腸薬や、疎開中の食事など、当時の生活の様子が分かる展示、戦時中の様子が記録されたたくさんの写真など、飢えに苦しみ、常に死と隣り合わせという想像を絶する辛い思いをした人や命を失ってしまった人が大勢いたという事実が胸が締め付けられた。

戦争は人が殺し合う残虐な行為だ。戦争は子供の命や自由までも簡単に奪ってしまう。人が人を殺すのは悪いこと。世界中の人が思いやりと優しさを持って、協力して戦争のない平和な世界を作らなければならない。昭和館のような施設に足を運んだり、体験談を聞いたり、本を読んだりして、戦争について学び、平和の大切さを考えることが重要だと、昭和館を見学して私は改めて思った。

私たちは戦争を実際に経験した人から直接話が聞ける最後の世代だ。祖父たちのように悲惨な経験をしてきた人たちの、平和な世界にしたいという強い願いを受け継ぎ、実現していくのが、私たちの使命だと思う。私の夢は児童文学作家になることだ。今日でもウクライナやガザ、アフガニスタンなど世界中で理不尽な紛争や内戦が絶えない。子供たちに、戦争の残酷さと平和の尊さを語り継ぐ言葉で、私は平和を紡いでいきたい。

審査員からのコメント

【岸本葉子さん・エッセイスト】

祖父から聞いた体験談を核として、昭和館での追体験により、戦争についての学びを広げ、深めたという行く立てが、非常に印象的。祖父の身に起きた出来事から、戦争とはどういうものかの理解や、世界平和への思いへ敷衍している。体験者の話を直接聞ける最後の世代と自覚して、語りの継承の中に進んで身を置き使命と夢を持つに至った、決意溢れる姿が力強く頼もしい。語り継ぐことの大事さを改めて教えられた作品である。

【関沢まゆみさん・国立歴史民俗博物館教授】

古賀さんの「平和を紡ぐ」は、自身の祖父(90歳)が小学5年生だったときの学童疎開の辛い経験を聞いていましたが、昭和館を見学して、「命を失ってしまった人が大勢いたという事実に、胸が締め付けられた」といいます。そして、現在のウクライナやガザでの戦闘にふれています。古賀さんの夢は児童文学作家。子供たちに戦争の残酷さと平和の尊さを語り継いでいきたいという夢を応援したいと思いました。

【伍藤忠春・昭和館館長】

祖父の体験談に耳を傾け、昭和館が戦争を追体験できる場所だとの認識に説得力がある。

自分たちが戦争体験者から直接話を聞ける最後の世代だとの認識も視野が広くて素晴らしい。